

アフリカの人々と名付け 25

身分証明書と戸籍、その思想

小馬 徹

身分証明書とその背景

名付けと国家の関係は、ネーションという概念とそれに基づく国民国家 (nation state) の概念の起点であるフランス大革命に遡って考える時に、一つの展望に繋がる。では、ネーションとは何か。「単一不可分のフランス人国家という規定は、フランス人という自覚をもった均質な人々の共同体を想起させる」が、フランス領内には言語や文化を大きく異にする多様で自律的な地域文化が含み込まれており、実際は「フランスに住む人々のフランス化宣言にほかならなかった」[木村靖「国民国家とナショナリズム」、樺山紘一他(編)『クロニクル世界全史』1994]。

大革命と19世紀の鉄道の発達は、雑多な「フランス市民」をパリへと流入させた。だが、「どこの出身の誰かも分からぬ無名の群衆は、統治者にとっては、潜在的な犯罪者の群れでもあった」[渡辺公三「犯罪者の顔写真と指紋」、『朝日百科 日本の歴史別冊』22, 1995] —— 前回触れたケニアの場合にも、小屋税や人头税の滞納者を犯罪者とみなす思考法が垣間見えるはずだ。

1880年代以降パリ警視庁で犯罪者の身元確認を担当したベルティオンは、「もともと勉強していた人類学の知識を応用した」。身体の細部の計測値が厳密に一致する個人は二人としないと見た彼は、偏執的な厳密さで撮影された顔写真による照合を最終的な確認手段としたが、「それは表情も動きもはぎ取られた『裸』の顔」であった[前掲書]。

なお、膨大な作業を要するベルティオン方式の欠点を克服して、指紋による個人の同定法を確立したのは、進化論の父ダーウィンの従兄弟ゴルトンだった。科学は、人間を、ま

たその身体をも執拗に分類し、支配する。

動きも表情も失った「名前」

行政官であり、且つ人類学者であったベルティオンの経歴は、行政人類学者と明らかに並行しているといえる。そして、植民地における個人の登録と顔写真や指紋による個人の同定もまた、並行しながら身分証明書へと流れ込んで合流している。

ついでながら、日本の警察がゴルトンの手法を制度として取り入れたのは、朝鮮併合の二年後、1912(明治45)年だった[前掲書]。間もなくそれに続いた「創氏改名」問題や、つい最近の「指紋押捺」問題の端緒がここにあったことは、もはや明らかだと思う。

人の名前は、単なる符丁やラベルではない。渡辺の^{ひき}響みにならえば、姓名という二つの名前の組み合わせとして登録された名前は、「表情も動きもはぎ取られた」名前だと言えるだろう。この場合、相手との関係や場面に応じて使い分けられる名前の空間的変異や、ある時点で自分が占めている社会的な立場と釣り合う名前を選ぶ時間的な変化は、厳密に排除されなければならないからだ。

何を苗字に選ぶか

何を苗字とするかは、特に大きな問題だ。それは、国家社会を構成する基本的な単位集団が何であるかを、ある程度まで確定する事に繋がる——まさに、「創氏改名」等の問題の根っこがここにあるのだ。

しかし、アフリカの事情をいきなり東アジアと比較するのは妥当ではない。東アジアの戸籍制度は、文字通り、経営体としての家を基本単位として人々を登録する点に大きな特

徴がある。一方、アフリカでは何処でも身分証明書によって、即ち個人を単位として人々を登録して来た。これは植民地期に宗主国が導入した制度を踏襲したものであり、古い独特の歴史的背景を持つ東アジアの例こそがむしろ特殊なのである。

ヨーロッパの国々も個人名 (autonym) と苗字 (family name) とを組み合わせ個人を登録して来た。では、この慣行に依拠する登録を制度化する時に、アフリカではどのような名前を苗字に引き当てたのだろうか。この点で、コートジボワールの事例が大局的な観点を与えてくれそうだ。この国でも、植民地化以前からイスラム化されていたマンデ系の諸社会では、かなり昔から苗字 (jamu) と個人名 (togo) が区別されていた。ギニアの初代大統領セク・トーレ (Sekou Toure) の名前も、典型的なマンデ系のものだ。マンデでは、語り部や鍛冶屋などのカーストには特有の苗字があり、容易に識別される。一方、マンデ以外の民族集団には固有の苗字がなく、身分証明書の記載には、実に様々な名前が用いられている [原口武彦「部族で異なる名前の文化」、松本脩作・大岩川嫩 (編)『第三世界の姓名』1994]。

苗字なき社会の伝統と現代

では、伝統的に苗字がなかった人間集団の名付けには、実際どんな変化が見られたのか。ザイールのテンボ人は、最近村役場に出生届を出す、例外なく父親がそれを行う。ただし、父親と母親のそれぞれが子供に命名する。そして、大概は母親が与えた名前が頻用されて通り名になる。だから、「現実には存在しない名前 (= 人間) が戸籍の上だけで存在するという奇妙なことに」なり、「成長してはじめて自分の本当の名前を知る」事態が起きると言う [梶茂樹「テンボ族における個人名」『季刊人類学』16(1), 1985]。

梶によると、「ヨーロッパの制度の影響か、

名前を書く場合は2つ書かなければならない」と思っているふしがあり、手紙には往々自分の「誕生名」に自称、または父親の「誕生名」を添える。更に、少数だが真に苗字的なものが生まれつつある。息子が父親の渾名を、その意味とは無関係にあたかも苗字のように用いており、「つまり、父親の名前でその個人は知られている」のだ [前掲書]。

両国と同様に旧仏領だったコンゴでも事情は似ている。伝統的には、諸民族集団の王や首長の家系を除いて、苗字を持つ者はなかった。身分証明書には、「洗礼名」(prénom) と「名前」(nom) を連記する。だが、同じ両親から生まれ、同じ家に住みながら「名前」が異なる者が何人もいる場合がある。双子やその次に生まれた子供、更には兄弟が死んだ後に生まれた子供には、それぞれに特別の「名前」を与えるからだ。ただし、現在都市部では、息子たちが父親の名前を苗字として受け継ぐのが一般的になりつつある [竹内進一「名前の意味と変容」、松本脩作・大岩川嫩、前掲書 1994]。

特殊といえる先の諸々の事態が起きるのは、コンゴの政府が戸籍ではなく身分証明書の発行を通じて国民を掌握しており、家族の苗字が異なっても不都合がないからだ。さらに、実際子供には個人名と同様に苗字を別々に与えることが出来、それが苗字の自由と変化に対する制度的な保証になっている [前掲書]。武内は、「名前の均質化、固定化という側面のみを強調することは偏った見方である。コンゴ人の想像力は、身分証明書によって形式的に固定化された名前を吹き飛ばすほど豊かなのだ」と言い切る [前掲書]。「表情も動きもはぎ取られた」名前となる事に抗する、人々の逞しい営みに彼は熱い視線を注ぐのだ。やや楽観的に過ぎるかも知れないが、彼の言葉は日本の戸籍制度を鋭く一撃している。

(こんま とおる 神奈川大学社会人類学)